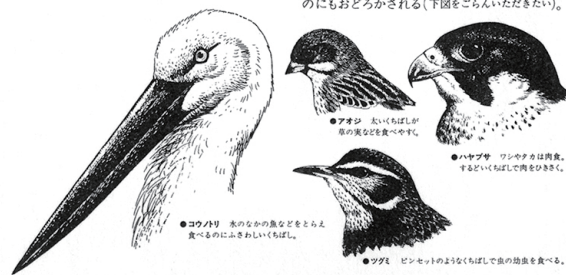


人類の前に、トリがいた。



トリは、いまから約1億5千万年前に出現した。生物が、原始的な生命を得てから、さまざまな進化の中で、トリはハチュウ類から、空を飛ぶための機能を十分にそなえて発生した。そのため、いまでも、卵を産むこと、うろこにおおれた足、くちばしなど、ハチュウ類のおもかげを残している。こうしてトリは、1億5千万年をかけて、全世界で8600種にも分類される生物となり、空を征服し、海から高山にまで君臨したのである。人類をふくむ哺乳類の祖先も、時を同じくしてジュラ紀に出現したが、ヒトとしての地球に足あとをのこすのは、200万年前である。

トリは、どんな生きものだろう。トリは、生まれてからの航空術の天才だ。全身が飛ぶためにつくられている(一部、例外はあるが)、背には空洞があり、軽く、胸には翼を動かす筋肉と、それを受ける独特の骨があり、消化器は、体重を軽くして飛びやすいようにするために食物を早く消化して外へ出すしくみになっている。いつでもすばやく活動できるように、体温は高い。そして何よりもすばらしい特徴は、飛ぶためにそなわった翼と羽毛である。人間では腕にあたる部分(羽)に変化したものだ。ワシタカのような猛禽類は、高い空からでも、動く獲物を見つけやすい眼のあたきを持っているという。また、トリの種類によって、生きる場所によって、あるいは食べものによって、くちばしが、それぞれ生きていくのにふさわしいかたちになっているのにもおどろかされる(下図をごらんください)。

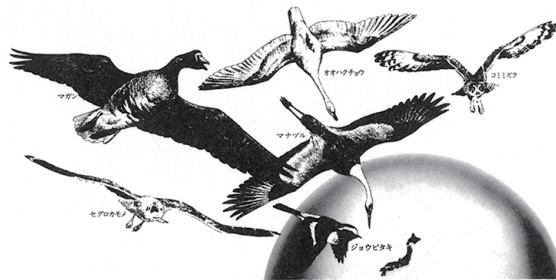


トリからのメッセージ 104

21世紀へ このすばらしい地球の仲間たちをのこしたい

トリは、移動する。

スズメやカラスのように、年中同じ場所にいるものは留鳥として区別するが、ウグイスのように、夏は山、冬は里へ移動するのを渡鳥という。カッコウやツバメなど、日本で夏に繁殖し、冬は南へ渡るのを夏鳥。ツグミやハクチョウのように夏に北で繁殖し、冬、日本に来るのを冬鳥。また、北で夏を、南で冬をすごす渡りの途中の、春秋に日本に寄るのを旅鳥として区別をする。



往くトリ、来るトリ——トリはなぜ渡るのか。季節によってその姿を見せたり消したりする渡り鳥と私たち人間は、昔から深いかわりを持ち、農業や漁業などの面でいろいろな知識を与えてくれただけでなく、詩歌をはじめさまざまな芸術にとりあげられ、親しまれてきた。でも、彼らはなぜ、危険をおかしてまで、何の計器も持たず、長い距離を飛ぶのか、それはまだよくわからない問題だ。考えられるのは①ある時期になると厳しい寒さと食物不足がおこるために、年間を同じ場所に棲んでいられない。②その場所から別の場所へ移っても、トリ自身に元へもどろうとする性質があった(帰巣性)、ということである。

①が秋の渡り、②が春の渡りにあたる。いずれにしても渡り鳥たちは、出発する方向がわかり、旅の途中でも正しい方向を保ち、目的地へ帰集する…この条件をそなえた「体内時計」とでもいうしかないすぐれた能力で、人間にとっては神秘としか呼びようのない渡りを、みごとにやってくるのである。ナベヅルやマナヅル、オオハクチョウのような大型の鳥から、キビタキやオオルリといった小鳥まで…。

日本で記録されたトリは約510種、そのうち、旅鳥をふくむ夏・冬の渡り鳥は220余種を数える。北はシベリア、アラスカから、南はオーストラリアから、日本で冬を越すもの、夏の繁殖期に来るものや、旅の途中の栄養補給に立ち寄るものなど、彼らは文字通り国境を越えた存在だ。自然保護や野鳥保護といったことばを持ち出すまでもなく、この、美しくたくましい国際親善使節を、国を超えてまわる義務がある。日本がアメリカやソ連、オーストラリア、中国と結んでいる渡り鳥条約も、そのような考え方にもつづいている。条約は、これらからも多くの国々と、とくに東南アジア諸国へとひろげていかなければならない。それが、1億5千万年の歴史を

もつトリたちへの、同じ地球の一員としてのヒトの「愛のあかし」ではないだろうか。



ヒトの心に「トリの保護区」を

財団法人 日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●この愛鳥キャンペーン・シリーズ広告は、日本鳥類保護連盟及び日本野鳥の会、内外の自然保護関係団体の指導と協力により、サントリー株式会社制作するものです。

●絶滅の「幻の鳥」から、あのヤンバルクイナまでをコレクション/サントリー協賛。

鳥の世界展

人類の前にトリがいた——はるか1億5千万年前の昔、はじめて地上を離れた祖先から、さまざまな能力を身につけて、サルからヒトへの進化を見てきたトリ。地球という大自然の中で、その生命をはぐくんできたトリの世界。この広告でお話

してきたおどろくべきトリたちの能力のかずかずが、130種・250羽の標本を組み合わせたとすばらしいジオラマで、やさしく展開されます。ほかに愛鳥ゲームコーナーやバードウォッチングマネルなど、参加する楽しさいっぱい展覧会です。

- とき——9月23日(金)～10月5日(火) 10時～18時(本館定休)
- ところ——札幌市・五番館 7階展示場 ☎011-251-0151
- 入場料——一般400円 小中学生300円 中学生以下2100円
- 主催——北海道新聞社・日本対外文化協会